ScriptSamurai Counseling

Pilot – “Outflow deterins Inflow”

ケース No.1:ベルエアに琴の響き

“出した分だけ返ってくる

Cast List

登場人物:レギュラー

Madam Maya （F.カウンセラー）

Satoru (マダムの弟子／ボディーガード／付き人）

David(弁護士）

Robert Sebastian (執事）

第一話登場人物

John Sandars (Hispanic)オフィス用の水タンクの販売

John (小学生）

John (３歳）

Luke (小学生)

Kane（ジョンの元部下）

専務（男）

経理（女）

Kala（ジョンの娘）

母親（夢の説明シーン）

娘　（夢の説明シーン）

妻　（路上で夫婦げんか）

夫　（路上で夫婦げんか）

グル・Puragamananda Swami（ヨガのインストラクター）

ACT ONE

INT. デービッドの弁護士事務所。弁護士事務所らしくない和風のインテリア。デービッドとジョンが差し向かいに置かれたカウチに座っている。

ジョン

（怒り心頭という様子で）顧客が相次いでキャンセルしてきたから、おかしいと思ったんですよ。そしたらケインが、顧客を横取りしてたってことが分かって。それで、裁判を起こしたら、今度は、向うからハラスメントで訴えられたというわけなんです。

デービッド

ふーむ。では、五年前に、この会社をはじめる前は、何を？

ジョン

最初は、ある企業に勤めていました。しかし、どうも人間関係がうまくいかなくて。それで四年でやめたんです。だから、次は、経営をしたいと思い、お金を集めて何人かで会社をつくったんです。でも、結論を言うと、結局その会社も辞めざるを得なくなり、投資しした分は全部パアですよ。

デービッド

原因は？

ジョン

いや、一緒に仕事を始めた仲間たちと、うまくいかなくなって…。あれもハラスメントで訴えたってよかったんだ…。でも、金がなかったのでそれもできずに、妻の父親からお金を借りて、今の会社を始めました。

デービッド

つまり、いつも職場に嫌な奴がいる、ということですかね？

ジョン

まあ、そういうことです。いつも、何かががうまくいきそうになると、誰かにぶち壊される。

デービッド

そして、同じシチュエーションが生じる。

ジョン

いや、今の会社は、しばらく軌道に乗っていたんです。利益もそれなりに出ていたし、義父への借金もほとんど終わっていて、これからやっと貯金ができるところまできていたんです。

デービッド

でも、このままいけば、同じような結末へ向うと不安になった。

ジョン

そうでです、だから、ここに相談に来たんです！俺の成功を妨害する、ケインの奴を、裁判で叩きのめしてやる！

デービッド

まあまあ、落ち着いてください。
いいですか。この世には、同じような目に何度も遭う人もいれば、一度も遭わない人もいる。車の事故だってそうだ。相手が原因の事故だって、何度か人にぶつけられる人と、一度も人にぶつけられたことがない人がいる。そう思いませんか？

ジョン

え？　そうかもしれないけど…。それが何だっていうんです？

デービッド

この世には、偶然のように思えて、実はそうではないことがあるということですよ。

ジョン

え？　いや、そんなことはどうでもいいんです。とにかく僕は、裁判に勝ちたいんだ。こんなことは許せませんよ。ただ地道に働いている俺が、どうしてこんなひどい目に遭わないといけないんだ…。

デービッド

ふーむ。あなたにとって、この世界は理不尽で、突然不幸がやってくるところなんですね…。

ジョン

で、今の弁護士に言われたんです。賠償金を取るための弁護は成功報酬でできるが、ハラスメントの疑いを払う裁判は、無料ではできない。まあ、当然ですよね。あなたはもう引退していて、気に入った仕事であれば、無料で引き受けてくれると聞いたので。

デービッド

そのとおりです。私は、実費しか請求しません…。ふーむ、そうだな…

デービッド、自分のデスクまで歩いてゆき、引き出しのなかから名刺を出して、それをジョンに差し出しながら。

デービッド

これ。あなたに、もっとぴったりの場所ですよ。その人にかかれば、裁判をしなくてもうまくいくかもしれません。

ジョン

えっ、裁判をしなくてもいいかもしれない方法って…いったいなんなんです？（訳が分からないような顔）…まさか、殺し屋を雇うってことじゃないでしょうね？

デービッド

いや、そのほうがお金はかかるでしょうよ。コホン。…フラクタル・ライフ・カウンセリング／進化した世界の理論をもちいたカウンセリングですよ。

しかも、無料でやってくれます。

ジョン

ハ？　フラクタ…ライフ？

デービッド

美しい日本人女性ですよ。まあ、試しに行ってごらんなさい。

ジョン、食い入るように名刺の文字を見る。そこには、Madam Ma-u, フラクタル現象学開発者、FRACTAL LIFE Counseling with TAW – Theory of an Advanced World. とある。住所はベルエア。
名刺のデザイン

END ACT ONE

ACT TWO

EXT. ベルエアの豪邸の玄関。
ジョン、呼び出しボタンを押してから、荘厳なフロント・ヤードを見回して感心する。
ドアが開き、執事が現れる。

執事

ジョン・サンダース様ですね。こちらです。奥さまは奥においでです。

INT.りっぱな玄関ホール、シャンデリア、赤いカーペットの敷かれた階段。真ん中に美しい桜の盆栽。
奥田玄宗の大きな日本画(桜)。ゴージャスだがどこかエキゾチックなロビー。
執事とジョン、リビングなどを通り抜けて、さらに奥へ。

執事

恐れ入りますが、ここからは靴をお脱ぎください。

ジョン

ハ？　ハア…(そうだった、日本人だったと思い出して、慌てて靴を脱ぐ)

その先に、尾形光琳の絵(梅)の描かれたふすまの和室がある。
執事が膝をついて、ふすまを開ける。すると、中は畳の和室になっている。着物を着た女性が、生け花をしている様子。尺八の音楽。鹿威しの音とせせらぎ。日本庭園がある。まるでお寺。

執事

奥様、お客様でございます。

マダム、横顔のままうなづく。ジョン、中に入り、マダムの前に胡坐をかく。執事が座布団を差し出す。
執事、部屋を出ていく。マダム、黙って生け花を続ける。

ジョン

(マダムが黙ったまま生け花を続けているので、話し始める)あの…。ええっと…。デービッドがここに行けと言うので来ましたが、いったい僕はここでなにを相談していいのかもわかりません。ええっと…。話はもう伝わっているでしょうか(居心地が悪そうに、座りなおしたりしている)

マダム、これから生ける花の束の中から、ジャカランダの枝をジョンの顔の前に差し出す。

マダム

（にっこりして）これがなんの花か、おわかりになる？

ジョン

ええっと…ジャカランダかな。

マダム

そうジャカランダの花です。では、ジャカランダの花の咲く木はどの種から生まれるか、おわかりですか？

ジョン

ええっ？　それはもちろんジャカランダでしょう。

マダム

正解です。

ジョン

は？

マダム

ジャカランダの花をつける木は、ジャカランダの木の種からしか生まれません。

ジョン

そりゃ、もちろんそうです。（心の声）誰にでもわかっているよ！

マダム

しかし、人間はおろかなことに、自分が生み出した花が、どの種から生まれたかがわからないという生き物なのです。

ジョン

はぁ～？

マダム

つまり、あなたの体験している出来事が花ならば、その花の出どころは一つしかありません。ところが、人間はそれがわからないというのですよ。

ジョン

はあ…、俺の体験している不運な出来事の発端は、俺の部下だったケインです。あいつが裏切ったんだ。

マダム

（キッと振り向いて）いいえ！あなたが体験していることは、あなたという種からしか生まれません。つまり、あなたが体験していることは、あなたが作り出したことだということです。

ジョン

はあ～？？

マダム

この実の名前は？

ジョン

知りませんよ。

マダム

キンカンです。これは丸ごと食べると、体にいいのです。でも、植えてすぐに実はなりませんね。

ジョン

そうですね…。（いぶかしげに）

マダム

こんな小さな実でも、種から数えて4年かかっています。つまり、あなたが体験していることは、あなたが種を植えました。それは最近のことではなく、ずっとずっと昔のことです。

ジョン

（イライラしてくる）はあ？　あの、おっしゃる意味がわからないんですが…。

マダム

（キッとジョンをにらんで）つまり、あなたが今体験していることは、あなたが昔、なにかしでかしたことの結果です。あなたが人に利用され、幸せな生活を奪われているのだとしたら、あなたが昔、誰かを利用し、幸せを奪ったということです。

ジョン

えっ、そんなはずは…。自分はなにも…。そんな馬鹿な…。

「カッポーン！」と、鹿威しの音が響く
マダム、庭の鹿威しがある方角へほんの少し首を傾げる。

EXT.*庭*
鹿威しに水が注がれ、注がれ、溜まり、溜まり、そして、水が満ちた竹の筒が、軸の反対側に倒れかかる。「カッポーン！」

マダム　（V.O.）

鹿威しの竹は、いつも動くわけはではありません。水がある程度たまった時に、一気に流れ出ます。人生も同じ。あなたが昔、何かをしても、すぐに結果が出るわけではない。だから、あなたはしばらく気が付きません。しかし、気が付かないままにしておくと、そのエネルギーは溜まっていって、

マダム（CONT'D）

（ジョンを見据えて）あるとき、現象となってあなたの世界に生じるのです。

ジョン

マダム。失礼ですが、おっしゃる意味がわかりません。僕が知りたいのは、どうやったら裁判に勝てるかということです。一所懸命やっているのに、いつもいいところまで行くとだめになる。まるで誰かにたたられているようだ…

マダム

まるで誰かにたたられる？　ふーん…。

ジョン

（うっかり変なことを言ってしまったなという顔で）いや、別にオカルトを信じているわけじゃ…。

マダム

（スイートピーの茎で、ジョンの後ろを指さしながら）ほら、そこに！

ジョン

（ぞっとして振り向いて）脅かさないでくださいよ。

マダムが指した後ろの欄間に見ざる聞かざる言わざるの透かしぼり

ジョン

なんですか、あれは（マダムのなぞかけにうんざりしてきたが、あきらめてもいる）

マダム

あなたの心はサルです。そのサルが、見たくないものは見ないし、聞きたくないものは聞かない。言いたくないことは言わない、と決めています。

ジョン

（返す言葉が無い）....

マダム

裁判をせずに、早く簡単にこの件を片づけたいならば、この3匹のサルをやめないといけません。

ジョン

（サルと呼ばれたことにムッとして）裁判とこの壁にかかったサルと何の関係があるっていうんですか！？　…どうやら時間の無駄のようです。僕は間違ったところに来たようだ。

ジョン、立ち上がろうとするが、足がしびれてもつれ、前方へつんのめって額を畳みに擦り付ける。

マダム

セバスチャン！

執事が膝まづいてふすまを開ける。ジョンは、ようやく立ち上がり、よろよろしながら部屋を出る。

INT.玄関ロビー

セバスチャン、ドアを開けてジョンを見送る。

ジョン

ありがとう、セバスチャン。

執事、ドアが閉まる瞬間に、ジョンの顔を見て微笑みながら。

執事

ごきげんよう、ミスターサンダース。またすぐにお目にかかります。

ドアが締まる。

ジョン

んっ？ （狐につままれたように、停めた車へ向かって歩き出す。）

INT.ジョンの会社

倉庫。小型のリフト車が商品を移動している。山のように積み上げられた商品から、ジョンの会社が、オフィスの水の販売をしているのが分かる。

倉庫の一部がオフィスになっている。

カメラがパンして、オフィスのドアと窓をとらえる。

INT.*ジョンのオフィス*

乱雑なオフィス内で、ジョンを含む数人がデスクで仕事をしている。

経　理

社長、今月の支払いにお金が足りません 25,000 ドルほど赤字になります。このままだと家賃か給料が払えなくなります。車のリースを解約して経費を…。

ジョン

なんだって？　車がなくなったら、配達できないじゃないか！

経理

顧客がこの3か月で60％まで減ってしまったので、配達量はかなり減っていますからね。

ジョン

わかった。俺がなんとかするから、今日はもう帰っていい。

ジョン（別の部屋の専務に）

おい、営業のほうはどうなっているんだ！　顧客が減る一方じゃないか。

専　務

あっちは半年間も半額サービスすることで客を引き寄せている。うちのほうは、乗り換える客を引き留めようとするのに精いっぱいで、新規の顧客まで手が回らないんだよ。あんたも裁判の書類ばかりつくっていないで、顧客確保に回るって約束だろう？

ジョン

できるだけのことはやってるさ！俺は裁判を2つも抱えているんだ、これ以上、手が回らないよ。

専　務

それはあんたの個人的な問題で、会社の問題じゃないだろ。あんたがあいつにやりすぎたんだよ。

ジョン

やりすぎた！？　俺は、何も無理強いした覚えはないぞ。みんな楽しんでいたし、あいつだって笑っていたじゃないか。どこがハラスメントなんだ！

専　務

悪いが、俺は帰るよ。最近、うつ気味なんだ…。

ジョン

…

CUT TO:「見ざる聞かざる言わざる」の絵
INT.　マダムの家

欄間の反対側の部屋。板張りで、テーブルと椅子2脚。安土桃山風。
ジョン、居心地が悪そうに、独りで椅子に座って、マダムを待っている。

CUT TO: ジョンの回想シーン
INT.デービットのオフィス

ジョン

あなたはとても優秀な弁護士だ。

デービッド

しかし、裁判なんていうのは、何か月もかかります。さらに、勝ったとしても、収入が元通りになるという保証は無い。

ジョン

妻が仕事をしているから、何とか生活はできています。でも、このままいくと、家も引っ越さないといけいし、そうなったら、子どもも学校を変わらないといけなくなって、家族に苦労をかけることになる。お願いします。助けてください。

デービッド

だから私は、飛び切りの近道を教えようと思って、マダムを紹介したんですよ。

ジョン

あの人はサイキックで、運命を変えるような祈祷でもしてくれるっていうんですか？　そんな原始的な方法で、解決できるわけがないじゃないですか。

デービット

いやいや、原始的どころか、かなり科学的な方法ですよ。マダムは、それを進化した世界の理論と名付けています。しかし、それを理解する頭脳を持ち合わせた人は、そうそういません。でも、理解できようとできまいと、結果があればいいのでしょう？

FADE OUT.

ジョン（V.O.）

進化した世界だって？　しかも、ここのどこが科学的だっていうんだ…

FADE IN.

INT.障子、日本庭園の鹿威し。どこからともなく聞こえる琴の音。東山魁夷の森と湖の画。和風のランプ。床の間の生け花。不思議な文字がある額。ジョンの前に、オスカー・デ・ラ・レンタのワンピースを着たマダムが座っている。

マダム

今日は何分もつかしら？

ジョン

いじめないでくださいよ。僕には、あなたが何者なのかわからない。でも、とにかくできることは全部やらなければどうにもならない。今、この問題を、どうしても根本的に解決したいんです。

マダム

根本的に解決したい？

ジョン

そうです。僕は一所懸命生きてきた。それなのに、こんなひどい目に遭うなんて、おかしいと思うんです。あなたのいう進化した世界では、きっと、なにかこんなことを終わらせる方法があるんじゃないですか？僕は、それが知りたいんだ。裁判に勝ちたいというよりも、この理不尽な世界を終わらせたいんだ。

マダム

この世界は理不尽ではないわ。あなたがそう思っているだけですよ。

ジョン

こんな豪邸に住んでいるあなたに、ビジネスがどんどん傾いていく怖さがわかりますか？　どんなに努力しても、社員に給料が出せなくなる、家賃が払えなくなる。一人二人と社員がやめていくから、やっと残ってくれた顧客へも配達が間に合わない。そして、また苦情の電話にお詫びする。家に帰ると、妻が心配してあれこれ言うし。また事業に失敗したら、引っ越さなくてはいけない。そうなったら娘が可哀想で…。

自分が、情けなくてたまらないんですよ…

マダム

（欄間を指さして）あの絵をごらんなさい。

ジョン

あのサルどもですか？　前に見ましたよ。

マダム

あのサルたちが見ない、聞かない、言わないのはなぜだと思う？

ジョン

見たくないからでしょ？

マダム

どうして見たくないのかしら？

ジョン

それは…、見たくないから見たくないんですよ。

マダム

それはね、傲慢だからよ。人の心の中には、サルのような部分がある。サル脳ね。そのサルはたったの2歳くらいの知能しかないくせに、傲慢なの。そして、怠慢なのよ。だから、ちょっと頑張ったくらいで、偉いとかよくやっていると思い込むの。それがサルよ。それを指摘されるのが嫌だから、見ない、聞かない、言わない、なのよ。

ジョン

マダム、僕の問題を解決する方法を知っているなら、教えてくださいよ。僕は、言われたことは、ちゃんと見るし、聞くし、しゃべりますから。

マダム

でも、あなたにその心の準備ができているかしら。

ジョン

なんでもしますから！

マダム

そう…。じゃあ、まず、あなたは、子どものころ、誰かをいじめていたわね？それを思い出しなさい。

ジョン

えっ、そんなこと…。僕は誰もいじめていた覚えは…。

マダム

ちゃんと昔の記憶を見なさい、聞きなさい、答えなさい。

ジョン

いや、本当に、誰もいじめたことなんか、ないです。僕は子どものころ、とても明るい子どもで…。

マダム

誰かの幸せを奪ったでしょ？

ジョン

えっ、そんなことは絶対に…。いや、そんな昔のことなんか、覚えていませんよ。
今のこととどんな関係があるんです？

マダム

あなたは確かに誰かをいじめていたわ。そして、その誰かは、あなたを憎んでいたわ。

ジョン

そんなことは……あ、いや…。

CUT TO: ジョンの回想シーン　小学校。十歳。

INT.*クラスルーム。ジョン、ルークの机の上にあるノート、鉛筆、消しゴム、筆箱などを一斉に床に落として、4、5人のクラスメートと一緒に笑ってからかっている。*

INT.*ジョン、ルークのバックパックを窓から外へ落とそうとしている。それを阻止しようとするルークは、他2名のクラスメイトに押さえつけられて動けない。ジョンは、バックパックを手から離して下へ落とし、勝ち誇ったように笑っている。悔しそうにジョンを睨みつけるルーク。*

EXT.*校庭。花壇のなかに落ちたバッグパックを拾おうとしているルークを、ジョンが後ろからどついて転ばせ、ルークは植木の合間にドサリと倒れ込む。それを観て、ほかの友達とあざけ笑っているジョン。*

INT. マダムの部屋
鹿威しの音。ジョンは黙って思い出している。

ジョン

（なにかが心にひっかかっていてモヤモヤした気持ちで落ち着かない）確かに、ルークのことをからかったけれど、いじめたというほどでは…　だって、あいつだって最初は笑っていたし、周りのみんなもそれを見て笑ってくれて。俺にとっては、楽しい小学校の思い出くらいの印象しか残っていないんです。

マダム

あなたのサル脳が、人を傷つけたことを、楽しかった思い出だと言い張るのね。

ジョン

傷つけただなんて…。嫌だったら、嫌だって言えばよかったんだ。友達だったんだから。

マダム

さっき、今の自分が味わっている苦しみについて話していたわよね。それは、あなたがルークに与えた苦しみと同じものなのよ。

ジョン

まさか。今の僕の苦痛は、あんなもんじゃありませんよ。

マダム

（ピシャリと）全く同じです。

マダム、立ち上がってコンソールに近づき、大皿にたくさん乗っているオレンジ一個を掴んで、それを横に並んである別の小さなボール(内側がステーンレススチールのようにオレンジの色を反映するマテリアルになった)に移しいれる。

マダム

ごらんなさい。この大きなお皿はあなたの今の脳。この小さなお皿は子どものころの脳。このオレンジは、感情の嵐よ。今のあなたには、このオレンジは小さく見えるけど、子どもの小さな世界では、このオレンジが毎日を占拠して、死にたいくらいつらいことなのです。

ジョン

しかし、自分が、子どもの頃に人をいじめたことと、今、裁判沙汰に巻き込まれているのと、どう関係しているっていうんですか？

マダム

あなた、夢を見るでしょ？

ジョン

ええ、でも、最近は、ストレスからの睡眠障害で、夢を見る暇もないですけど。

マダム

夢はね、深層意識の活動の一部のことなの。あなたの意識は、あなたが眠っている間もいつでも活動しているわ。海の中の魚みたいに、ひっきりなしに活動しているの。心理学者の言う夢と、私が言う夢の違いはね…。たとえばね、あなたが三歳のころ、絵を描いているとするでしょ。

CUT TO:(INCERT SCENE)

INT. *一般家庭のテーブル。三歳の子どもが白い紙に線を描いている。母親がそれをそばで見ている。*

母親

なにを描いているの？

子ども

(笑って)えっとね…

子ども、さらに描く。だんだんと線が重ねられていく

母親

あ、わかった。おうちね？

子ども
うん！

INT. マダムの部屋

マダム
つまり、線だけ描いておいただけと思っても、そのうちにそれらが重なっていき、意味を成すようになる。意識の活動も同じ。起きている間に、無意識に溜められた思考が、あるとき意味を成すようになって、そこに感情が付け足されて、ストーリーに出来上がって来る。その過程を、私は夢と呼んでいるの。

マダム、部屋の奥に戻り、リモコンで障子を開けるとスクリーンが現れる。ジョンは、この部屋にハイテクがあったことにびっくりしている。そして、そこに図形が現れ、線やマルが重なっていき、人になったり、怪獣になったりしている。

マダム（V.O.）
夢の中では、たくさんの人物が現れる。怪獣も、お化けも、動物もね。すごく意地悪な人に泣かされる夢も見るし、人に追いかけられる夢も見る。それらは、みんなあなたの意識の活動なのよ。

マダム
夢の中では、あなたは怪獣にもなるし、お母さんにもなる。ケインにもなるし、ルークにもなるの。あなたは誰でもあるのよ。すべての役柄を一人で演じているの。
そして、あなたが目を覚ますとき、一番多く演じた役柄が、「自分」として認識されているの。そして、それ以外のものは、自分の周りの人として認識されているのよ。
これがあなたが生きている世界なのよ。

ジョン
おっしゃることがわかりませんが…（脂汗をかいている）

マダム
簡単にいえば、あなたが同じ事を何度も頭のなかで思考すると、そのエネルギーが溜まってきて、やがて、あなたの世界に現象化されはじめるの。そして、一度現象化されたものは、あなたが、その思考を止めない限り、繰り返されるいうことです。

ジョン

（はたと気がつく）そういえば、ルークにしたのと同じことを、ケインにもしていたのかもしれない。あいつをからかうと、周りの女の子達が笑うんですよ。だから、それが嬉しくて、あいつをからかった。

マダム

そう、あなたのサル脳がつくりあげたストーリーが、フラクタル現象となって繰り返されているからよ。

ジョン

え？　フラクタル現象？　それはなんですか？

マダム

相似形の現象ということ。つまり、同じことが繰り返されるということよ。

ジョン

うむ…わかったようなわからないような…。

マダム

これを本当に理解することは、誰にでもできることじゃないわ。ただ、この仕組みがあるから、あなたの問題も解決できるということなのです。

ジョン

え、どうやって？！　早く教えてくれ！

マダム

ふーん…

マダムはジョンを上から下まで見ている。だらしない態度で立っているジョン。まるで競馬の結果を聞くかのように、ギラギラしている。マダムに対する尊敬が見られない。

マダム

あなたにはまだ教えられそうもないわね。

ジョン

えっ、どうしてですか？

マダム

あなたはまだまだ傲慢すぎる。

ジョン

そんな！　こんなにお願いしているのに、どうして教えてくれないんです？　金を払えばいいんですか？　いくらなんです？　払いますよ！

マダム

ほらほら、それよ。あなたはなぜ、腹を立てているのかしら？

ジョン

えっ？

マダム

教えてもらって当然、と思っているからよね？　それを傲慢というのよ。

ジョン、批判されたと感じて、表情が硬くなる。
マダム、黙って立ち上がって縁側に向かい、庭を見る。

マダム

私が教えることは、とてもシンプルなことなのよ。でもね、人は、それを聞くと、「なあんだ、そんなことか」って馬鹿にして、最初から知っていたフリをするか、「そんなことは今までやってきた」というか、それとも「そんなの役に立つはずがない」と言って否定するかなのよ。そして、せっかく人が教えた貴重なことを台無しにするの。あなたはそうならないという約束ができる？

ジョン

そ、それは…。それはわかりませんよ。なにをしないといけないのかを聞かないうちは…。

マダム

ほらほら、私がこれから言うことを判断しようと言うのね？　あなたは自分が判断できる知恵があると思っているでしょ？

ジョン

それはもちろんですよ。僕はもう大人なんだ。自分が指示されることを判断するのは当たり前じゃないですか！

マダム

今日はもうお帰りなさい。あなたには、まだ準備ができていない。

ジョン

えっ…。だって、今日教えてくれないと！　僕は一日たつごとに、毎日赤字をつくってしまうんですよ！

マダム

セバスチャン！

執事

（ふすまを開けて）サンダース様。お帰りはこちらです。

ジョン、溜息をつき、しぶしぶと出ていく

マダム、一人残って、遠くを見ながら、思い出を思い出している。

挿入シーン　（30年前）

Int. マダムがかつて相談に行ったカウンセラーの部屋。30代のマダムがカウンセラーの向かいに座っていて(カウンセラーの姿は見えない)、悔しそうに泣いている。カウンセラーの背中越しに、マダムの姿が見える。

マヤ（マダム30代）

お願いです。今日こそは教えてください。私は本当に解決したいんです。根本的に解決して、ここから抜け出したいんです。だから、どんな言葉でも聞きます。厳しい言葉でも、文句は言いません。だから、どうぞ真実を教えてください。私のどこがいけないんですか？　何が原因で、こんな目に遭うんですか？　なんでもします。だから、教えてください。私がその言葉に傷つこうが、気にせずに教えてください。もう何年も苦しんできました。絶対に抜け出したいんです。…

（うつむいて、手を目に当てて泣く）

INT.マダムの元の家。マダム、ため息をついて思い出を味わっている。

INT.ジョンの家・ジョンの部屋

ジョン、自分の部屋の机で、頭を抱えている
カーラ、ジョンの娘、10歳が、ドアからいきなり入ってくる。

カーラ
ねえ、パパ。この問題、解けないの。教えて。

ジョン
ああ…、悪いけど、パパは今、そんな気分じゃないんだ。

カーラ
だって、明日出さないといけないのよ。今手伝って！　明日出せないと、赤点になっちゃうもん！

ジョン
（頭を上げて）カーラ。それはお前の都合だろう？

カーラ、その言葉を無視して、怒りながら、ジョンの手にプリントを叩き付ける。
カーラの態度にむっとするジョン。すると、ジョンの頭の中に、マダムの言葉がよみがえる。

マダム（V.O.)
あたなは、なぜ腹を立てているのかしら？
教えてもらって当然、と思っているからよね？　それを傲慢というのよ。

CUT TO: フラッシュバック・シーン
INT.マダムの部屋
ジョン、腹を立てた顔をして。

ジョン
えっ…。だって、今日教えてくれないと！　僕は一日経つごとに、毎日赤字をつくってしまうんですよ！

CUT TO: INT. ジョンの部屋
ジョン、ハッとする。なにかがつかめそうな気がしている。

ジョン
カーラ、悪いけど、パパは、今、大切なことを考えているんだ。こんな遅くになってから、はじめるからだ。自分の責任なんだから、自分でやりなさい。

カーラ

パパひどい！　いいもん！　じゃ、ママに聞く！

怒って出ていくカーラ。ジョンはため息をつく

CUT TO:*フラッシュバック・シーン*

INT.マダムの部屋

マダムの部屋の奥に現れたスクリーンに映っている図形、線やマルが重なっていき、人になったり、怪獣になったりしている。

マダム(V.O.)

夢の中では、あなたは怪獣にもなるし、お母さんにもなる。ケインにもなるし、ルークにもなるの。あなたは誰でもあるのよ。すべての役柄を一人で演じているの。

そして、あなたが目を覚ますとき、一番多く演じた役柄が、「自分」として認識されているの。そして、それ以外のものは、自分の周りの人として認識されているのよ。

これがあなたが生きている世界なのよ。

CONTINUED IMAGE:スクリーンには、*さらに、カーラの怒った顔、ルークが睨んでいる顔、ケインが苦虫を噛み潰したような顔、職場の専務の顔などが浮かんでは消えてゆく。*

ジョン（V.O.）

夢の中では自分はカーラでもある？俺がすべての役柄を一人で演じている？

FADE OUT

INT. ジョンのオフィス

ジョン、額に汗をかきながら、必死に電話で顧客をつなぎとめようとしている。

ジョン

今月からもういらない？　いや、そこをなんとか…。はい、はい。いや、今月は二本サービスさせていただきますので、そこをなんとか、今月も続けていただくようにお願いします。はい、ハイ。ありがとうございます！

ジョン、電話を切り、ため息をつく

ジョン

いったいなんだって、俺がこんな電話に出て、必死に営業しないといけなくなったんだ。

専　務

おい、ジョン、人手が足りないんだ。事務処理なんか夜にやれ！　昼間は配達しないと。契約があるのに配達が遅れると、顧客に切られてしまうぞ！　配達がもう三人しかいないんだ。もう夜中も働くしかないさ。

ジョン

わかってるさ！

ジョン、配達表をもって、事務所を出て、駐車場へ向かって歩きながら、

ジョン

（ひとり言）くそ～！　ケインのくそったれめ！　よくもこんな思いをさせてくれたな！！　俺なんかどうなってもいいと思っているんだろう！　お前に俺がなにをしたっていうんだ！　さんざん俺の幸せを奪っておきながら、お前にいい思いなんか絶対にさせないぞ！

ちきしょ～！

EXT.駐車場

ジョン、ビルから出て配送車へと歩いてゆく。

男と女が、夫婦ゲンカをしている。

妻

よくもこんな思いをさせてくれたわね～！　あたしなんかどうなってもいいと思っているんでしょ！　あたしがあんたに何をしたっていうのよ～！！　さんざんあたしの幸せを奪っておきながら、一人だけいい思いをしようなんて、絶対にさせないわよ！

妻、バッグで夫をたたき倒し、そのまま車に乗って去っていく。しかし、ハンドルを切り損ねて、木にぶつかってしまった。まわりの通行人が車に走り寄っている。

ジョン、びっくりして、後ずさりしながら、車に乗り込む。

INT.ジョンの車中

ジョン、慌てて車に乗り込む。今、目撃したことが信じられない。

ジョン

（ごくりと唾を飲み込み）今、何が起きたんだ？　ええと…。あの女が、俺のセリフとまったく同じことを言ったんだ。男を殴ったかと思ったら、そして、車ごと木にぶつかって…。

CUT TO:フラッシュバック・シーン

INT.マダムの部屋

マダム

そう、あなたのサル脳がつくりあげたストーリーが、フラクタル現象となって繰り返されているからよ。

CUT TO:

INT.ジョンの車中

ジョン

（ゾッとして）えっ！？こいつは大変だ。自分がしたのと同じ事が現象化する？。心の中で思ったことが、繰り返される！？へ〜っ！！俺は夢の中で自分を演じている〜〜！？

ジョン、慌てて携帯を取り出し、電話をかける。

ジョン

ジョン・サンダースです。どうしてもマダムに会いたいんです！　今からうかがってもいいでしょうか？！

執事（V.O.)

（落ち着いてゆっくりと）残念ですが、マダムはお出かけになりました。しばらくお帰りになりません。

ジョン

ええ〜！！　そんな。どこにいらっしゃるのですか？これから、そちらの方へ向かいますけど！

執事(V.O.)

奥様は、東京です。

ジョン

ト、トーキョー？

ジョン、愕然とする。

執事(V.O.)

奥様から伝言をお預かりしております。もし、自分の留守にあなたが会いたいとおっしゃったときに

は、アシスタントのサトルに奥様の代理を務めるようにと。

ジョン

サトル？　それは誰ですか？　男？　女？

END ACT TWO

ACT THREE

INT. マダムの家 – ベルエアの豪邸の地下 - 道場のような板の間の部屋

ジョン、口をあんぐり開けたまま、目の前の人物にあっけにとられている。

ジョンの前には、サトル、20代のサムライ風の日本人。ゴエモンのような男。袴姿で、竹刀を片手に仁王立ちしている。

サトル

（木刀でジョンを指しながら）そこに直れ！

ジョン

な、直れ？

サトル

（竹刀を振り上げて）お前の根性をたたっきる！

ジョン

ひえ～！　ちょ、ちょっと待ってくれ！　**マダム**が指示しているのは、これなのか？

サトル

いや、これは俺の趣味だ。

ジョン

勘弁してくれ…。

サトル、遠慮なく竹刀を振り下ろして、ジョンの右肩を打つ。

ジョン

うわ～。ちょっと待ってくれ～。なんで俺がお前に殴られなきゃいけないんだ～！

サトル

（竹刀を振り上げたまま）少しは人の痛みを知るためだ！

ジョン

俺はひどい目に遭っているほうなんだぞ！　お前が叩きのめすのは、ケインのほうだろう！　俺じゃない。

サトル

ケインなどは知らぬ。（もう一振りする）ちょこまかするな！　お前がひどい目に遭っていうと言うならば、お前が夢の中で意地悪をしたからだ！

ジョン

そんな馬鹿な。俺がどんな夢をみたかなんて、覚えていないし、そんなの、コントロールできないよ。

サトル

愚か者め。だからお前はいつまでも凡人なのだ。殴られたくなければ、そこに座り、土下座せよ。

ジョン

ドゲザ？　なんだ、そりゃ？

サトル

私はマダムから、このやり方の真髄を教わっている。良いか。見本を見せてやる。

サトル、板の間に正座をして座り、両手と頭を前に倒すようにして土下座の見本を見せる。

サトル

申し訳ございませんでした。本当に私は悪者でした。人の苦しみも知らず、自己中心的で、自分が楽しいと思ったことをして何が悪い、と思っておりました。そのために、あなたにとてもつらい思いをさせました。申し訳ございません。

サトル、慇懃な雰囲気をかもし出しながら深々と土下座して見せる。それから、ジョンに向き直る。

サトル

良いか、このようにやるのだ。やってみよ。

ジョン

ええ～？　これはマダムの指示なのかい？

サトル

そうだ、お前の SELF ENTITLEMENT をたたき出すための特効薬だと。

ジョン

（一瞬、いぶかしげな表情をするが）…わかった、やるよ…。で、誰に向かって謝るんだい？

サトル

お前の胸に聞け。お前は誰かをいじめて、なにかを奪ったことがあるだろう。

ジョン

マダムに話したルークのことかい？　あんなの、もう30年も昔だよ。

サトル

よいからやれ！

ジョン

（のろのろし頭を下げて）申し訳ございませんでした。本当に私は悪者でした。

ジョン、頭を上げた角度から首を傾げてサトルの顔を伺う。

サトル

なんだ、それは！？

ジョン

ドゲザ、やったよ。

サトル

（片膝で立って、竹刀を構える）ば、馬鹿者～！！そんなものは土下座ではない！！　心が全然こもっておらぬ。本気でやれ！

ジョン

どうだっていいじゃないか。誰も聞いていやしない。

サトル

裁判に何年もかけて、生活を台無しにしたいのか？　そんなものでお前の心の平安は来るのか？そうではないだろう。根本的に解決させるのだ。それには、問題の種から叩き潰すのだ。それを今お前に教えている。もっと素直にやれ。お前は傲慢すぎる！

ジョン

やれやれ、また傲慢か。やりますよ。やればいいんでしょ。

サトル、竹刀でバシッとジョンの肩を叩く。

サトル

その態度はなんだ！　今まで誰も知らなかった特急の解決法をお前はタダで学ぼうとしているのだぞ。マダムの時間はもちろん、今、俺の時間も奪っているのだぞ。それなのに、真剣にやろうとせず、ただ時間つぶしのつもりなのか！？　そんな態度だから、お前の人生はそこどまりなんだ！

ジョン

（唇をかんで）むむ…。わかったよ…。（神妙になって）
申し訳ございません。私が悪うございました。人の苦しみも知らず、自己中心的で、自分が楽しいと思ったことをして何が悪い、と思っておりました。そのために、あなたにとてもつらい思いをさせました。申し訳ございません。

サトル

繰り返せ！　100回繰り返せ！

ジョン

（ええ～？！と言いかけて振り向いたが、そのまま黙って）…申し訳ございません。私が悪うございました。人の苦しみも知らず、自己中心的で、自分が楽しいと思ったことをして何が悪い、と思っておりました。そのために、あなたにとてもつらい思いをさせました。申し訳ございません。

ジョン、少し頭を上げるが、神妙にしている。

サトル

そうだ。その言葉はお前の言葉だが、それは同時に、お前を苦しませている相手が、いつかお前に言う言葉でもある。その言葉を真剣に言ってほしいなら、お前が今真剣に言うことだ。お前が今まで、傷つけてきた相手にな。

ジョン

……申し訳ございません。私が悪うございました。人の苦しみも知らず、自己中心的で、自分が楽しいと思ったことをして何が悪い、と思っておりました。そのために、あなたにとてもつらい思いをさせました。申し訳ございません。

INT.ジョンの心の中の空想
ケインが土下座して、自分に対して、一生懸命に詫びている姿が現れる。

ケイン

申し訳ございません。人の苦しみも知らず…

CUT TO:時間の流れを表す挿入。
何度も下げるジョンの頭、繰り返される言葉。時計。
いつの間にか、ケインが自分に謝っているのではなく、その姿が重なって、ケインが自分、自分が

ルークになっている。そして、自分がルークに心の底から詫びているイメージ

INT.マダムの家 – ベルエアの豪邸の地下 – 道場のような板の間の部屋
仁王立ちになったサトルに監督されながら、ジョンが、土下座を続けている。

ジョン
申し訳ございません。私が悪うございました。人の苦しみも知らず、自己中心的で、自分が楽しいと思ったことをして何が悪い、と思っておりました。そのために、あなたにとてもつらい思いをさせました。---

ジョン、突然涙があふれてくる。

ジョン（CONT'D)
–-（それにハッとして…）そうだ！　思い出した。俺、とんでもないことをしていた…。

CUT TO:ジョンの回想シーン／モンタージュ
INT.小学校の校舎内／廊下
ジョン、ルーク、他3、4人のクラスメートが輪になって笑っている。ジョン、突然、ルークの頭を脇に抱えるようにして、げんこつでルークの頭をグリグリやる。クラスメートたちは笑う。ジョンの脇固めから放たれたルークは、皆が笑っているため、無理して薄笑いを浮かべているが、苦痛の色がうかがえる。

INT.*小学校のクラスルーム、ジョン、ルークが隣の机に座っているクラスメートと話をしている隙に、ルークの机の上の文房具を奪って教室の後ろのドアへ向って走り去る。それに気がついたルーク、席を立ってジョンを追いかける。*

ジョン（CONT'D V.O.)
ルークを毎日みんなの前でからかって、あいつ、最初は笑っていたけど、そのうちに俺を見るといつも下を向くようになった。それで、俺もちょっと悪いかな、と思ったんだけど、自分が悪くないことを証明したくて、またあいつをからかって、みんなを笑わせて、そしてふざけているだけだって思い込ませようとしていたんだ。本当は、あいつが嫌がっているのを分かっていたのに！

CONTINUED:ジョンの回想シーン／モンタージュ
INT.小学校の校舎内／廊下
ジョンが歩いていると、向うからルークが歩いて来る。すれ違いざまに、ジョンが、ルークを馬鹿にしたように声をかけて笑うが、ルークは、ジョンに目線もやらずに歩み去る。その後ろ姿を、ジョンは、

「反応がねえ、つまんねえ奴」と、次は何をしてからかってやろうかといった面持ちで見送る。

INT.*小学校のクラスルーム、授業の最中。ジョンが、目線をルークの席へ移す。ルークは欠席、誰も座っていない机と椅子。*

EXT.校舎添いの通路。ジョンと数人のクラスメートがルークを取り囲んでからかっている。ジョンが、ルークのバックパックを脱がせ、シャツを脱がしはじめる。ルークは抵抗するが、ジョンが無理強いして脱がせてしまう。友達は、周りで歓声をあげて喜んでいる。シャツを脱がせた後、ジョンはルークを突き飛ばして転ばせる。クラスメートは、益々、歓喜する。ジョンと友達が、高笑いしながら去ってゆく。ルーク、コンクリートの上に尻餅をついたまま座っている。怒りも、悲しみも沸いてこない、全てをあきらめきったような表情。

ジョン（CONTINUED V.O.)

でも、俺はただ、みんなを楽しませる人気者になりたかったんだ。そのうちにルークをからかうのが日課になって、文房具を奪ったりして遊んでいるつもりだった。そのうち、あいつは具合が悪くなったのか、学校を休むようになって…。久しぶりにあいつがやってきたとき、俺はほかの友達と一緒にあいつを取り囲んで、「お前にはこんないい服はいらないだろう」って、シャツを脱がせたんだ。そして、みんなで笑った…。俺、本当に嫌な奴だった。とんでもない意地悪な奴だった。本当に悪者だった。人間一人を苦しめたんだ。

CONTINUED:ジョンの回想シーン／モンタージュ

INT.*校舎添いの通路。コンクリートの上で空白の表情をしていたルーク、大きなため息をついてから、ようやく横に落とされたシャツを拾って着る。なにかを思った後、そのまま膝を抱え、両腕のなかに頭を落とした格好で泣く。*

カメラがひいて、生徒たちが授業のために校舎へ入り、誰もいなくなった校庭が広がってゆく。

カメラがさらにひいて、ひとりぼっち、取り残されたルークが、校庭のなかでどんどん小さくなってゆく。

ジョン（CONT'D V.O.)

（後悔の念に苛まれる）…そうか。このどうしようもない気持ち。悪くないのに、ひどい目に遭わされるっていう気持ち。先行きが不安で、なにもかもおしまいにしてしまいたい気持ち。そして、自分の無力さに自分で絶望している。そうか。あのときのあいつの気持ちはこれだったんだ。それを今俺は、味わっているんだ。

ルーク、ごめん。ごめんな。まだ子どもだったお前にあんな苦しい思いをさせて....だから、今、自分が苦しむ羽目になっている。

CUT TO:INT. *マダムの家 – ベルエアの豪邸の地下 – 道場のような板の間の部屋*
床にうつ伏して、泣き始めるジョン。それを見守るサトル。
サトル、くるりと袴を翻して部屋の壁へ歩いてゆく。壁だと思っていたのは、スライディング・ドアで、それを開くと、最新型のエンターテイメント・システムが現れる。

ジョン（V.O.)
苦しいよ。苦しい。相手を憎んでも憎み切れないほど怒りで胸がいっぱいになんだ。…でも、お前から見た俺の姿が、ケインなんだね…。わかったよ。わかった。ごめんな、ごめん。許してくれなんて、虫が良すぎるよな。ごめんな。おれ、二度とそんなことはしない。二度とあんな俺にはならない。

サトル、リモコンを手にして、巨大なフラットスクリーン TV のスイッチを入れる。
ジョン、両腕を床につき頭を上げた状態のまま、ルークに向ってしゃべり続ける。

ジョン
本当はケインのこともいじめてたんだ。俺は、人がどんなに嫌な思いをするかなんて、なにも考えちゃいない。自分が楽しい思いをすることばかり優先していたんだ。わかったよ。わかった。ケインもルークも、今、自分の心の中にいるんだ。俺は、ルークであり、ケインなんだ。ごめん。ごめんな…。

マダム（V.O.)
（やさしい声で）そのまま目を閉じなさい。

ジョン
えっ…マダム？（振り向きかけたが、そのまま顔を上げない）

CUT TO:*テレビ画面にマダムが映っている*

マダム
目を閉じて、イメージしなさい。三歳のあなたを、瞼の裏にイメージするの。

INT.マダムの家　道場
ジョンは黙ってドゲザしたまま、目を閉じている。

CUT TO:空想シーン
EXT.小学校の校庭
三歳のジョン、バッグパックを拾おうとしている小学生のルークを花壇に突き倒す。

大人のジョン、三歳のジョンの後ろに立ち、子どものジョンの肩にそっと手を置く。
三歳のジョンが、振り向いて、大人のジョンの顔を不思議そうに見上げる。

マダム（V.O.)

その三歳の自分が、心の中の未熟なあなたよ。十歳のときにも、現在のあなたにも、心の中にはその三歳のあなたがいたの。今のあなたの頭の中にいる未熟な自己よ。
自分の楽しみのことを優先して、まわりの人を馬鹿にして、気持ちを考えもせず人を意地悪にからかう。そんなことをして、優越感を感じようとしている、サルのようなあなたよ。そのあなたに、大人のあなたが言いなさい。

CONTINUED：ジョンの空想シーン
EXT.小学校の校庭
三歳のジョンが、振り向いて、大人のジョンの顔を不思議そうに見上げる。
大人のジョンが、腰を屈めて、子どものジョンと目線を合わせる。
大人のジョンが、マダムと同じ言葉をしゃべりはじめるのが口パクで読み取れる。

マダム（V.O.)

「お前は本当に、ルークにひどいことをしたね。自分が人気者になりたくて、人を笑わせるために、ルークをからかって遊んだ。ルークがどんなに嫌な思いをしていたか、本当は少し知っていたよね。でも、お前は自分の利益のために無視したね。そして、人を苦しめたままだった。大人の自分は、それで今、ルークと同じ思いを味わっているんだよ。本当につらいんだよ。なにも悪くないのに、どんどん心が苦しくなって、生きるのがつらいんだよ。頑張って生きようとしているのに、どんどん落ちていくんだよ。これは、お前が人に与えた苦しみなんだよ。---

CUT TO:ジョンの回想シーン
EXT.校舎沿いの歩道
ルーク、膝を抱えて泣いている。
大人のジョン、ルークの頭を優しく撫でる。
ルーク、顔を上げて、大人のジョンを不審そうに見上げる。
大人のジョン、ルークを立ち上がらせて、バックパックを背負わせてあげる。それから、ルークのまえにひざまずき、そして、頭を深く下げて土下座をする。

マダム（CONT'D V.O.)

---ルークに謝りなさい。心の底から謝りなさい。さあ、次に、目の前にルークにこう言いなさい。「自尊心を傷つけられ、なにもかも失うかもしれないという恐怖を味あわせてごめんなさい。奪ってごめんなさい。苦しめてごめんなさい。毎日、地獄のようなつらい思いをさせてごめんなさい。本当にご

めんなさい。こんな自分は滅びて当然です。本当にごめんなさい。もう二度としません」

INT.マダムの家　道場

ジョン、目を閉じたまま泣いているが、大分落ち着いている。

マダム（V.O.）

どう？　ルークはどんな表情をしているかしら？

ジョン

（目を閉じたまま）…最初は暗い顔をしていたけど…、今は笑っています。僕が謝ったことを受け入れてくれたようです。わかってくれたなら、もういいよって言っているような気がします。

サトル、ジョンの返答のタイミングに合わせて、マダムの映っているビデオをポーズしたり、プレイしたりしている。プレイ・ボタンを押すと画面のマダムが喋りはじめる。

マダム（テレビ画面）

そう、だったらいいわ。サトル、あとは任せたわよ。

サトル、テレビ画面のマダムに向かって深々と頭を下げる。

サトル

かしこまりました！

サトル、ビデオを止めて、ジョンのほうへ向き直る。

サトル

目を開けてもよいぞ。

ジョン

（夢から覚めたかのように）

今のはなんだったんだろう。本当に、ルークと話せたみたいだった。ルークの心とつながったみたいだった。ケインが本当にあのときの自分だったんだって、心の底から実感が沸き上がった。あいつは俺だった。不思議な感覚だ…。

サトル

おまえは、今、拡張した意識領域を体験したんだ。これは、1％の悟りさ。そして、それが増えてゆ

けば、いつか、おまえの現実は、おまえの溜まった思考が現象化して出来上がる、という真実が分かるようになる…それがマダムの教えだよ。

ジョン

（しばらく黙ってあじわっている）そうか。…なんだかわかった気がする。裁判で戦っても、結局勝てなかっただろうな。勝ったとしても、また同じような問題が起きるんだよな。俺が反省するまでは、俺は安心を得ることなんかできなかったんだ。

サトル

そのとおりだ。

ジョン

（ジョン、立ち上がりながら）ありがとう。俺はわかったよ。ジャカランダの花は、ジャカランダの種からしか生まれない。

ジョン、足がしびれてうまく立ち上がれない。バランスをくずして倒れてしまう。

ジョン（CONT'D)

（床のうえで「く」の字になって横たわったまま、しびれに耐えながら）理由なくひどい目に遭うことはないのだってね。自分がつらい思いをしているときは、実は自分がかつて誰かに同じ思いをさせたってことが実感できたよ。

サトル

（うむ、うむとうなづいて）しばらくは、さっきのように心の中でルークに謝れ。さっきのように悟れ。すると、1％の悟りが、2％の悟りになる。

ジョン、「く」の字のまま、両腕をサトルの方へ差し出す。
サトル、木刀を差し出す。ジョン、木刀の先を両手でつかんで引っ張ってもらい、ようやく身体を起こす。

サトル

実際に、誰かに謝りに行かなくても、周りに変化が現れてくる。続けていれば、そのうちケインも変わってくるさ。

ジョン、床に座って足を揉む。

ジョン

え、本当かい？　ふうん。そうだとすごいね…。

サトル

とにかくやれよ。続けることだ。自分ひとりでできるし、金もかからん。後はやるだけだ。3%、4%と悟ってゆけ。

ジョン

わかった。やるよ。ありがとう。

Ext.マダムの家のパティオ／プールサイド－3ヶ月後　-

パティオの花壇に囲まれた場所に、ヨガマットを二枚並んでいる。その上で、マダムとインストラクターが、プライベート・レッスンを終えようとしている。

サトル、竹刀を持ったまま、ビーチサイドで瞑想をしている。

ヨガのインストラクター、40歳、タンクトップにHaremヨガパンツにポニーテールに髭顔のスリムでイケメン白人男性、ヨガマットを丸めてサックにしまい退出するところ。

ヨガ・インストラクター

（マダムに手をあわせて）では、また来週の火曜日に。

マダム

（同じく合掌して）ナマステ、グル・ナラヤナ・スワミ。

執事、グルを玄関へ案内していく。

マダム、くるりと向きを変え、プールサイドのアウトドア・ラウンジング・セットへと歩いてゆく。

アウトドア煖炉の前のラウンジング・セットのテーブルの上には、執事によってお茶の用意がされている。

そこに座っているのは、ジョン。マダムを見ると、ささっと立ち上がって挨拶をする。

ジョン

急に、すみませんです。お忙しいのは分かってたんですが、こちらの方で用事があったので、寄らせてもらいました。

マダム

いいタイミングでした。次のコンファランス・コールまで15分ありますから。

ジョン

マダム。その節は、本当にありがとうございました。あれから僕は、なんどもあれをやりました。そしたら、たった三日後に、なんとケインが、ハラスメントの訴訟を取り下げたんです。そして、10日後には、顧客を盗んだことに関しては詫びてきて、リスト代を払うと言ってきました。そして、今では、また一緒に仕事をすることになりました。

マダム、ニコニコして聞いている。

ジョン（CONT'D)

本当に不思議なんです！　僕はケインにはなにも言わなかったのに、ケインは心から反省して、僕に良くしようとしてくれるんです。奇跡としか言いようがありません。

ジョン、身を乗り出すようにして。

***ジョン**（CONT'D)*

マダム、もう一つ不思議なことがあるんです。うちの娘が最近、性格が変わったように、思いやりのある子になったんです。傲慢なところがあったんだけど…、いや、僕に似ていたのか…。いや、ともかく、娘まで変わってしまったんです。本当に不思議です…。

（マダム、それを聞きながら、思い出を思い出す）

挿入シーン

（マヤ、カウンセラーの部屋のドアを開けて）

先生！　できたんです！　やっと変わったんです！

これは奇跡です。息子が…息子が…私に「かあさん、今までごめんね。そしてありがとう」って…。

先生が真実を教えてくれたおかげです…。

（マヤ、喜びの涙を流しながら、先生にお礼を言う）

執事が、うやうやしくヘッドセットをもってやってくる。

執事

マダム、ハーポ社からお電話が入っています。

（マダム、はっとして、回想シーンから戻り、）

マダム

あら、もう時間ね。

マダム、手慣れた手つきでヘッドセットをつけながら

マダム

（ジョンに向って）それは、あなたが進化した世界を生きはじめた証拠なのよ。

マダム

（電話の向うの相手に向かって）こちらは、マダム・マヤ。

マダム

（ジョンに向かって）じゃ、お元気で。

マダム、カウチから立ち上がり、屋敷のほうへ歩いてゆく。

マダム

（電話の向うの相手に）ハロー、キャサリン！　あなたの最新のプロジェクトの件、伺ったわ。もちろん、参加させていただくわ！

カウチに残されたジョン、温かい面持ちでマダムが歩み去るのを見送り、目線をプール側へ移す。
サトル、袴を脱ぎ捨てて、ふんどし姿で、奇声をあげながらプールに飛び込む。

END OF ACT THREE